第十回ワークショップ（合評会）

2011 年 6 月 29 日開催

■合評テクスト

Buck-Morss, Susan

1992(2000) Aesthetics and Anaesthetics: Walter Benjamin's Artwork Essay Reconsidered. *October* 62: 3-41.（「美学と非美学：ヴァルター・ベンヤミンの「芸術作品」論再考」『アメリカ批評理論の現在：ベンヤミン、アドルノ、フロムを越えて』マーティン・ジェイ（編）、永井務（監訳）、吉田正岳（訳）、pp. 383-442、こうち書房）

まず久保氏がテクストの概説をした。それを踏まえて、以下３点の議論がなされた。

Ⅰ　テクスト理解
Ⅱ　戻るべき場所を想定することの是非
Ⅲ　ファンタズマゴリアを認識する仕方や基準

Ⅰ　テクスト理解

まず、「皮肉なことに（あるいは弁証法的に）美学が記述するのは、政治的な応答としてファシズムに対する毒消しが展開される分野」[バック=モース 2000: 385]とあるが、なぜ「皮肉なこと」になるのかという質問があった（大杉氏）。久保氏は、政治と美学の意味合いが変わって、美学は「美」学にもかかわらず非美的で、ブレヒト的な意味での政治的芸術を記述するようになったからと説明した（久保氏）。これに対し、議論の流れはわかるが、何の皮肉かわからないという声があり、美学の政治化によって政治の美学化を回避するにも関わらず政治の美学化と同じ土俵に乗ってしまっていることに対する皮肉かという確認があった（大杉氏）。久保氏は、美学が従来の美ではないものを記述していることが皮肉なのだと応じた（久保氏）。この応答に対し、ファシズムの毒消しになることでファシズムの考える美に乗ってしまうという

意味かという質問があり（大杉氏）、ファシズムの考える美と対極のことを目的としているとの応答があり（久保氏）、ならば皮肉ではなくまさにベンヤミンの試みたことだとの反応があった（大杉氏）。この議論に対し、当該箇所で強調点を付された美学とは、政治が美学化した結果の美学と政治化した美学とのうち恐らく後者を指し、美学の名のままに政治化するのだから記述対象は政治的様相であるという流れとして読めば、皮肉ではないと言いたいのかという確認があり（武村氏）、そうだとの返答があった（大杉氏）。それを踏まえて、政治化した美学はファシズムと闘う為に取り扱い領域を拡大させたが、それは政治の美学化の結果としての美学が捨てた領域だったという理解が示され（武村氏）、ならばわかるとの声があった（大杉氏）。

次に、「非アウラ的仕方でヒトラーにカメラを向ける」[ibid: 423]、「ファシズムのアウラ的美学が隠している」とあるが[ibid: 425]、そこで言うアウラとは複製時代にも壊されずに残るアウラと同じものかという問いが出た（大杉氏）。これに対して久保氏は、ここではヒトラーをカッコイイものと捉えないという意味だと応じた（久保氏）。だとすればバック=モースはアウラという語をルーズに用い、当該箇所では日常語のアウラという意味で使っているのではないかとの声があった（大杉氏）。これに対し、基本的にはアウラはないけれども、アウラを作り出す写真はあり、そうしたアウラは日常語としてのアウラとは完全に異なる物ではないとの応答があった（久保氏）。これを受けて武村氏は、脱魔術化した世界で失われていったとされるアウラの擬似的な代替物としてのアウラということだろうと指摘した（武村氏）。

その上で武村氏は、当該箇所ではヒトラーの写真分析が疑問であり、子供の泣き顔と同じ顔をしているからと言ってカッコ悪いとは一概に言えないであろうから、結論部分の主張がわからないと述べた（武村氏）。この意見は大方の賛意を得た。その上で、我々にはわからないような結論に達していると感じるのはなぜかという疑問が出された（大杉氏）。

加えて、最後の一文がわからないという指摘があった（久保氏）。久保氏は、ファシズムは残像の反射で、現代技術の世界ではファシズム的美学が反映しており、我々はそうしたファシズム的美学を未だに強く持っていると恐らくは言いたいのだろうと述べた（久保氏）。これに対し、ファシズム自体があるモノの残像なのあかという質問があり（武村氏）、残像というより補色のようなものだろうとの応答があった（久保氏）。いずれにしても、我々がどうしたらよいかを一切述べていないとの指摘があった（久保氏）。

Ⅱ　戻るべき場所を想定することの是非

バック＝モースの依拠する疎外論の枠組みが議論となった。まず大杉氏は、（1）まっとうな人類学者として疎外という語で戻るべき場所が想定されていることに納得がいかないこと、（2）そうした場が本稿では神経学や自然の反応に求められているように見えるが、フィルターをどければナマの経験があると考えることは嘘臭く見えること、の二点を述べた（大杉氏）。ファンタズマゴリアから醒めた時に戻る場所が神経科学的記述だったのかという問いが出され（井頭氏）、ジェンダー、神経学、戦争に対するトラウマと話の進展ゆえにそう読めるとの回答があった（大杉氏）。これに対し、4 節で展開される脳の話は美的感覚の議論と結びつけられずにトラウマの話へと進んでしまう為、論全体における神経生理学の位置づけが理解できないとの同意が示された（武村氏）。

大杉氏は、戦争や工場の悲惨な経験から無感覚になる為にファンタズマゴリアが登場するという議論の流れがあり、誰でも工場労働は嫌だろうという素朴な経験論に戻れと言われているが、人類学者としてそんな場所はあるはずがないと思うと応じた。その上で、公共的な格子によってナマの経験によって遮断されているはずで、遮断されているからこそ戻るべき場所が喚起力を持って想像されるのかもしれないが、言われて戻れる場所ではないと述べた（大杉氏）。これに対し、そこへ戻るべき「体験する身体」の残像しか我々は持たないのだから、そこでナルシスティックに循環しているファシズム的な仕組みに気づけ、というのがバック＝モースの主張ではあるまいかとの指摘があった（武村氏）。この指摘に対して大杉氏は、残像というファンタズマゴリアの中で自己認識しているということだろうが、ベンヤミンとバック＝モースが疎外から回復すべき場所を簡単に想定しているのに納得がいかないと述べた。その上で、疎外の回復を目指した例にソ連やキューバがあるが、結果的により大きなファンタズマゴリアを作っただけであり、だからこそ疎外論を納得できないと述べた（大杉氏）。この意見に対し、バック＝モースは戻る場所を想定しているかという疑問が出され（大河内氏）、議論の隠れた主役だとの応答があった（大杉氏）。次に、冒頭でバック＝モースが展開するベンヤミン理解が一般的なものかという疑問が出された（武村氏）。これに対して久保氏は、ベンヤミンはアドルノのように映画を否定しておらず、社会を考えさせるという意味で写真や映画に政治的潜勢力があると考えていると一般的には言われると説明した（久保氏）。そう主張する際のベンヤミンは現状認識として述べているだけでそうした技術を称揚しているわけではないだろうという意見があり（武村氏）、そうだとの返答があった（久保氏）。その上で、ベンヤミンは現状認識から繋がる未来認識を示しつつそれを皇帝しているというよりは単に是認して、致し方ないから対応してゆかねばと考えているのではないかという意見があっ

たが（武村氏）、そこまで言ってしまうとクローズアップなどに可能性を見ている部分を見失うと、久保氏は応じた（久保氏）。武村氏から affirmation という英語の当該領域における精確な意味について質問が出され（武村氏）、井川氏による解説があった（井川氏）。久保氏は、1936 年時点ではベンヤミンはファシズムに抗するにはこれしかないと思っていたようだが、ボードレール論ではベンヤミンは真の経験に戻れ、或いは現状から出発しろという風に揺れ動くようになっていると指摘した（久保氏）。

それとの関連で、「大衆社会に対するベンヤミンの批判的な理解は、20世紀までにモダニズムの伝統が硬直させてしまった芸術、政治、美学の布置連関を爆破することによって、モダニズムの伝統を―（中略）―爆破することであった」[ibid: 386]とあるが、統語的にも意味がわからないが一体この箇所はベンヤミの理解として正しいのかという疑義が呈された（武村氏）。これに対し、当該箇所は誤訳だという意見があり（久保氏、大杉氏）、歴史的前衛運動ではなく広義の近代文化がファシズムを生み出す芸術、政治美学と結びついて硬直してしまっているという関連を破壊することだろうとの見解が示された（久保氏）。更には、ナマの経験によってファンタズマゴリアとしての美学を破壊するという議論かという確認があり（大杉氏）、大体そうだとの応答があった（久保氏）。

再度、戻るべき場所が話題になった。まず大杉氏が、結論部でファンタズマゴリアから抜け出すのは容易ではないと述べているが、途中では戻る余地があるかのような書き方がされており、私たちはどうしたらよいのか、正常な文脈を認知せよというわけでもなさそうに見えると述べた（大杉氏）。ここで大杉氏に対して、戻る場所があると想定することに納得できないならば、どういう構図の元でファンタズマゴリアからの脱却が示唆されていればよいかという質問が出た（井頭氏）。これに対し大杉氏は、戻る場所があるから簡単に脱却できるという語り口は恐らく人類学で禁じられていると述べた。その上で、イデオロギーの内容や背後ではなく様式が重要であるというジジェクの見解に個人的にはほぼ同意しており、人類学者としての仕事はファンタズマゴリアの形式性をきちんと描くことだと考えていると述べた（大杉氏）。この意見に対して賛意が示された（武村氏）。そうした人類学的観点はわかるが、ベンヤミンはそうした記述に留まるつもりだったのか否かという質問が出た（井頭氏）。これに対して久保氏は、ベンヤミンがファシズム的ファンタズマゴリアに否をつきつけたのは対抗意識ゆえであって、基本的には形式分析を重要視しており、悪いものと良いものを区別するのではなく作品の成長に寄与すべきものとして批評を捉えているとの回答があった（久保氏）。

ここで科学哲学者の井頭氏に対し、コンピューターを脳と同じと言えるようになるには、どういうファンタズマゴリアを共有すればよいかという研究をしているのかと

いう質問が出された（大杉氏）。これに対し、人間の脳は心を持つ主体として機能するための不可欠な基盤を成しているが、心を持つ主体として人間を見るのも一つのファンタズマゴリアであり、それが出来るならコンピューターやロボットでも出来るのではないかという観点で研究していると応答があった（井頭氏）。ファンタズマゴリアの形式性を問題にし、その背後を問題にしていないのかという確認があり（大杉氏）、そうだとの返答があった（井頭氏）。であれば、多元論的自然主義の立場を取る井頭氏は、自然科学の言明が真理であるということ――換言すれば形式性がその背後にある内容物と対応していること――を放棄しない自然科学者に対してどういう立場を取っているのかという質問が出た（大杉氏）。これに対し、科学者は基本的に科学が世界の実像を表現しているという信念を抱き、また方法論として用いているが、その構図は目的と手法が一致しておらず、論証によって正当化しきることは不可能であると考えていると述べた（井頭氏）。そうであるならば、記述上はプラグマティックな立場を取る必要があるのではないかという指摘があったが（大杉氏）、まだそうした記述を要する場面に会っていないとの応答があった（井頭氏）。更に、自然科学者（例えば医者）は一つの自然で多数の見方を取っている以上、一対一対応の考えを捨てないのではないだろうが、バック＝モースは井頭氏に近い立場か、自然科学者かという問いが出された（大杉氏）。これに対して、そう考えるならば非アウラ的であることを別のアウラと言われれば納得できるのかと問い（井頭氏）、そうだとの応答があった（大杉氏）。この応答に対し、非アウラ的とはアウラの消失により真理が見えるという話ではなかったはずではないかという確認があった（大河内氏）。しかし麻酔薬の比喩に見るように、遮断するものとして常に捉えられ、遮断先にあるモノの前に遮断壁があるという議論の構図になっているとの指摘があった（大杉氏）。

先に問題となったバック=モースのベンヤミン理解が話題に上った。「かれは芸術にもっと難しい課題を要求している。すなわち、それは身体の感覚器官の疎外を解消することであり、人類の自己保存のための云々」[ibid: 385]とあるが、「自己の自己保存の為」はベンヤミンに即して言えるのかどうか怪しいとの指摘があった（大河内氏）。この指摘に対し、久保氏はバック=モースは筆を滑らせたのではないかと応じた（久保氏）。

ここで大河内氏が、アドルノ宥和の想起という議論に言及した。アドルノは、予め宥和を経験しているのではなく、物消化された現実の認識を通じて宥和の経験が効果として想起され、想起された宥和が物象化された現実に対して破壊力を持つと論じているが、このアドルノの議論とベンヤミンの議論のどの位繋がっているのかという質問があった（大河内氏）。この問いに対して久保氏は、最初からアウラが感じられていたわけではなく、アウラが切れかかる時にアウラがあったとわかるものだと応じた（久保氏）。これに対し、そういう後で作られる思い出であれば完璧に理解できると

の反応があり（大杉氏）、またマルクス、フロイト、ヘーゲルもそういう風に考えているとの指摘があった（大河内氏）。

Ⅲ　ファンタズマゴリアを認識する仕方や基準

仮にベンヤミンがそう言っているとして、どうすればよいかという問いが出された（大杉氏）。この問いに対して久保氏は、ファンタズマゴリアというまやかしから離れて真実があるわけではないので、まやかしに沿って考えるしかないと述べているのではないかと応じた（久保氏）。誰もが囚われるのだとすれば、どのようにして良い、悪いという等級を位置づけるのか、幻想を引っくり返しただけで結果的に害のあったものだけを責めているだけではないかという疑問が出された（大杉氏）。これに対し、戦後の栄がなどの娯楽産業における「悪」のファンタズマゴリア形成に対して結果的にナチが果たした寄与は極めて大きいという点では、ナチズムは益があったという視点も可能であるが、どのような視点から等級を決めるのかということをどう決めるのか、という問題提起があった（武村氏）。

話を戻して、全てのものがファンタズマゴリアであると指摘する為には、指摘する側の判断基準が必要なのではないかという疑問が出された（井頭氏）。これに対して大杉氏は、異言語間の翻訳に超言語という俯瞰的視点は不要であり、単に違うファンタズマゴリアがあるだけであって、現実の複数の可能性は確認できると応じた（大杉氏）。これに対し井頭氏は、例えば英語と日本語の翻訳をする際、自分は日本語をメタ言語とし、その基準の上で翻訳しているのではないかと述べた（井頭氏）。大杉氏は、比較の際にメタ言語を置く必要はなく、日本語をオブジェクトレベルに留めて比較することが可能ではないかと応じた（大杉氏）。これに対し、何かがファンタズマゴリアだという主張自体は超言語ではなくて何らかの観点や文脈の中でなされている言語行為だが、そうした言語行為自体がファンタズマゴリアの一つだろうという意見が出され（井頭氏）、全てファンタズマゴリアだということは予め真理として与えられているものではなく、逐次確認していく必要があるとの応答があった（大杉氏）。井頭氏は、何かがファンタズマゴリアだという言説自体は何らかの観点や文脈でなされている個別実践である以上、個別実践に内在的に逐次相対化を進めていく必要があるのであり、全てがファンタズマゴリアだというような主張あるいはズブズブの相対主義を一気に結論するような議論には論理的に飛躍があるだろうと応じた。その上で、ズブズブの相対主義と、究極の立脚点があるとする普遍主義的な立場という両極端の二つの立場の中間に、相対化の作業を逐一進めていくという穏健な立場がありうるのであり、これを支持したいと考えている、と述べた（井頭氏）。これに対し大杉氏は、

人類学者の浜本満の議論[浜本満 （1994）「差異のとらえかた：相対主義と普遍主義」]を引いて以下のように述べた。相対主義だと相互交通はできないはずだが、自分の使っている通常の語法とズラすことである程度まで翻訳できてしまうのであり、ゆえに相対主義は個別主義ではないと浜本満が述べているが、今のところ個人的にはそれがベストと考えていると（大杉氏）。その上で、自然的多元主義が相対主義と違うのならば井頭氏はどこにいるのかと大杉氏は問い（大杉氏）、個別実践の中にいるとの応答があり（井頭氏）、そうであれば同じだとの返事があった（大杉氏）。

最後に、医療人類学者の浜田氏は、麻酔や麻薬は独特の経験を引き起こすわけで、感覚を抑えるものとして一方的に描くのは問題があるのではないかと指摘した。その上で、バック＝モースの強調するような形で美学／非美学の差異はどこまで言えるのか、人類学者として麻薬や麻酔の経験を詰めていけばもう少し違うものが見えるのではないかという印象を持ったと述べた（浜田氏）。これに対して久保氏は、ベンヤミン自身もハシシ実験をやっており、麻薬はアウラとか独特の美学を起こすものというのが普通の見方だろうとコメントした（久保氏）。